

胃癌

胃癌治療ガイドラインに沿って治療を行っています。ごく早期の胃がんには消化器内科と共同で内視鏡による治療を行っており、進行の程度に応じて縮小手術、定型手術、拡大手術、抗がん剤による治療を選択しています。2004年より内視鏡的粘膜下層切開剥離術(ESD)が導入され、適応範囲の拡大により内視鏡的治療の割合も増加しています。2000年から、内視鏡的治療の困難な早期胃癌には腹腔鏡を用いた手術を行っています。この方法では通常の傷の約3分の1の傷で済みますので、手術の翌日から歩行ができ、早期の退院や社会復帰が可能となります。

進行癌では、各種画像診断により手術適応の検討を厳密に行い、根治手術が困難な場合には化学療法を先行しています。最近5年間の切除率は96.5%、術後1ヶ月以内の死亡率は0%と良好な成績を取っています。手術に際して超音波凝固切開装置などを駆使して極力出血量を少なくするように配慮し、輸血率は約10%と低率であります。また2017年11月からは腹腔鏡手術をさらに進化させたロボット支援下手術も開始しています。